



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

悪性骨腫瘍に対する抗癌剤と L A K
細胞を用いた養子免疫療法に関する研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 武内, 章二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/162

は し が き

悪性骨腫瘍，特に骨肉腫は極めて予後不良の疾患であり，1960年以前の5年生存率はわずかに5～10%であった。

1970年より，我々は骨肉腫患者に対して抗癌剤化学療法による局所動注療法と手術的治療の併用を行い，症例によっては患肢温存を可能とする手術療法を確立し，5年生存率も飛躍的に向上してきた。

しかし，他の分野での悪性腫瘍と比較すると予後は不良であり，現在の治療方法では予後改善の期待は出来ない。

しかも，骨肉腫患者は若年者に発生し，近年のQOLの精神で転移との関係を考えてみると，その原因の第一は肺転移にあり，早期からの肺転移による腫瘍死である。したがって，肺転移をいかに抑制するかが予後向上につながり，肺転移の抑制が最も重要な課題と考えられる。

1985年 Rosenberg 等は，自己のリンパ球をIL-2を用いて体外で培養（LAK細胞を作製）し，再度担癌患者に戻す方法（養子免疫療法）を報告して以来，その有効性が注目されてきた。

悪性骨腫瘍の予後を改善することは急務の課題であり，従来より我々が確立してきた抗癌剤の局所動注療法に加え，LAK細胞を用いた養子免疫療法の併用により治療効果の改善と予後の向上は極めて高いと考えられる。

本研究の目的は，悪性骨腫瘍に対する新しい免疫化学療法の確立を目指し，基礎的，臨床的基盤にたった研究を行うことを目的とした。

研究組織

研究代表者：武内章二（岐阜大学医療技術短期大学部教授）

研究経費

平成5年度	1,100千円
平成6年度	800千円
計	1,900千円